

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 205

# 下町陣屋跡

一般国道429号単県道路改築に伴う発掘調査

2007

岡山県教育委員会



遺跡遠景（東から）



石垣全景（南から）

# 序

『太平記』にその名が記載されている竹山城は、中世後期の吉野郡第一の山城です。この竹山城が所在している美作市下町（旧大原町下町）は、竹山城に在城した新免氏以降、津山藩、徳川幕府、土浦藩、明石藩等支配者が移り変わってきました。この下町地区は、享保18年（1733）に美作市古町（旧大原町古町）から幕府の陣屋が移されて以来、幕府や各藩の陣屋が置かれ、明治維新に至るまでこの地域の政治の中心地でした。

このたび、一般国道429号単県道路改築に伴い、路線内の周知の遺跡である下町陣屋跡についての取り扱いを協議してまいりましたが、現状での保存が困難であるとの結論に達し、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになりました。

下町陣屋跡は、調査面積は狭いものの石垣が一部残存しており、また陣屋敷地内からは石組みの雨落ち溝等が検出されるなど、陣屋の状況を解明する手がかりとなる遺構が確認されました。

これらの調査成果を収載したこの報告書が文化財の保護・保存に活用されるとともに、地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

発掘調査の実施及び報告書の作成にあたりましては、地元住民の皆様をはじめ、岡山県美作県民局、美作市教育委員会からは多大な御助力を賜りました。記して深甚なる謝意を表する次第です。

平成19年 2 月

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 松 本 和 男

# 例 言

- 1 本書は、一般国道429号単県道路改築に伴い、岡山県教育委員会が岡山県美作県民局建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、<sup>しもまちじんや</sup>下町陣屋跡の調査報告書である。
- 2 遺跡は、美作市下町498-6に所在する。
- 3 発掘調査は平成17年6月に岡本寛久・小嶋善邦が担当して実施した。面積は100㎡である。
- 4 本書の作成は平成17年10月に実施し、小嶋が担当した。
- 5 本書の執筆・編集は小嶋が担当した。
- 6 本報告書に係る遺物のうち、陶磁器類は佐賀県立九州陶磁資料館 大橋康二氏に、石材は岡山大学理学部 鈴木茂之氏に鑑定を依頼した。また、明石藩に関する文献資料については明石市立図書館 大西昌一氏、高札の判読については岡山県立博物館 貝原靖浩氏・浅野慎太郎氏の御助力を得た。記して厚くお礼申し上げる。
- 7 美作市 春名伸吾氏からは、春名家所蔵の高札及び伝「陣屋の井戸」出土遺物の掲載を快諾していただいた。記して感謝の意を表する次第である。
- 8 遺構写真については調査担当者が撮影し、遺物写真については江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 9 本書に関連する出土遺物及び図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

# 凡 例

- 1 本報告書に使用した高度値は海拔高であり、方位は平面直角座標第V系の座標北である。また、遺構配置図等の座標値及び抄録に記載した経緯度は、世界測地系に準拠している。遺跡付近の磁北は西偏 $7^{\circ}14'$ を測る。
- 2 本報告書の遺構及び遺物実測図の縮尺率は本文中に図示または明記している。
- 3 遺物番号のうち土器・陶磁器についてはそのまま番号だけを付け、金属器にはMを番号の前に付けている。なお、遺物番号は各種類ごとに通し番号とした。
- 4 土器実測図のうち中軸線の左右に白抜きのあるものは、小破片のために口径の推定が困難なものである。
- 5 一覧表における遺物の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）に準拠している。そのほか、本文中の土層の色調は調査担当者の記述による。
- 6 本報告書第1・4図に掲載した地図は、国土地理院発行1/50,000地形図の「佐用」及び国土地理院発行1/25,000地形図の「古町」を複製し、加筆したものである。
- 7 本報告書の時代・時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために世紀などを併用している。

# 目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1
第3節 発掘調査及び報告書作成の体制	2
第4節 日誌抄	3
第5節 報告書作成の経過	3
第2章 遺跡をとりまく環境	4
第3章 調査の概要	9
第1節 調査区の概要	9
第2節 検出された遺構・遺物	10
第4章 まとめ	16

遺物一覧（観察）表

写真図版

報告書抄録

# 図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/50,000)	1	第7図 トレンチ土層断面図 (1/60)	10
第2図 調査地位置図 (1/5,000)	1	第8図 石垣① (1/60)	11
第3図 調査区位置図 (1/1,000)	2	第9図 石垣模式図① (1/120)	11
第4図 下町陣屋跡と周辺遺跡分布図 (1/25,000)	6	第10図 排水穴石敷き断面図 (1/30)	11
第5図 春名家所蔵 伝「陣屋の井戸」出土 遺物及び「高札」 (1/3・1/2・1/7)	8	第11図 石垣② (1/60)	12
第6図 調査区遺構配置図 (1/150)	9	第12図 石垣模式図② (1/120)	12
		第13図 土壙 (1/30)	14
		第14図 溝 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)	14

第15図 旧耕作土（旧表土）出土遺物 (1/4) .....	15	(1/4・1/3) .....	15
第16図 陣屋造成土出土遺物		第17図 表土・耕作土出土遺物 (1/4) .....	15

## 表 目 次

第1表 埋蔵文化財発掘の通知 (法第94条) .....	3	第3表 埋蔵文化財発見通知 (法第100条) .....	3
第2表 埋蔵文化財発掘調査の報告 (法第99条) .....	3	第4表 下町村略年表 .....	16

## 図 版 目 次

図版 1	3 石垣<排水穴石敷き> (北西から)
1 調査区遠景 (東から)	図版 5
2 調査区近景 (西から)	1 石垣<排水穴石敷き> (北西から)
3 調査前風景 (南から)	2 溝<南西側> (南西から)
図版 2	3 溝<北東側> (北から)
1 石垣全景 (南から)	図版 6
2 石垣全景 (北東から)	1 A-B断面 (北から)
3 石垣<西側> (南東から)	2 A-B断面<石垣裏込状況> (北西から)
図版 3	3 C-D断面 (西から)
1 石垣<排水穴付近> (南東から)	図版 7
2 石垣<屈曲部> (南東から)	1 溝出土遺物
3 石垣<東側> (東から)	2 包含層出土遺物
図版 4	図版 8
1 石垣<屈曲部拡大> (南東から)	春名家所蔵遺物
2 石垣<東端部> (東から)	



遺跡位置図 (1/2,000,000) アミフセ：旧大原町域

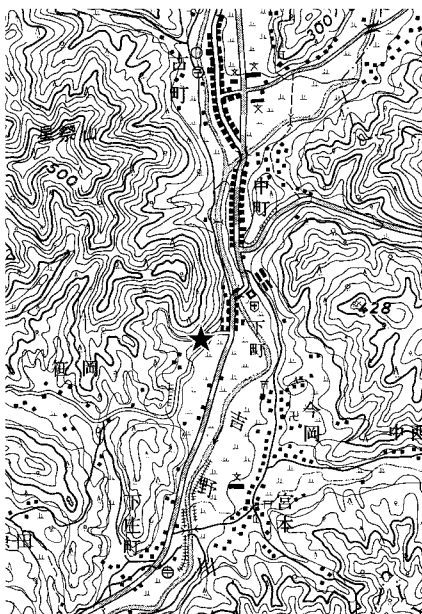
# 第1章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

## 第1節 調査にいたる経緯

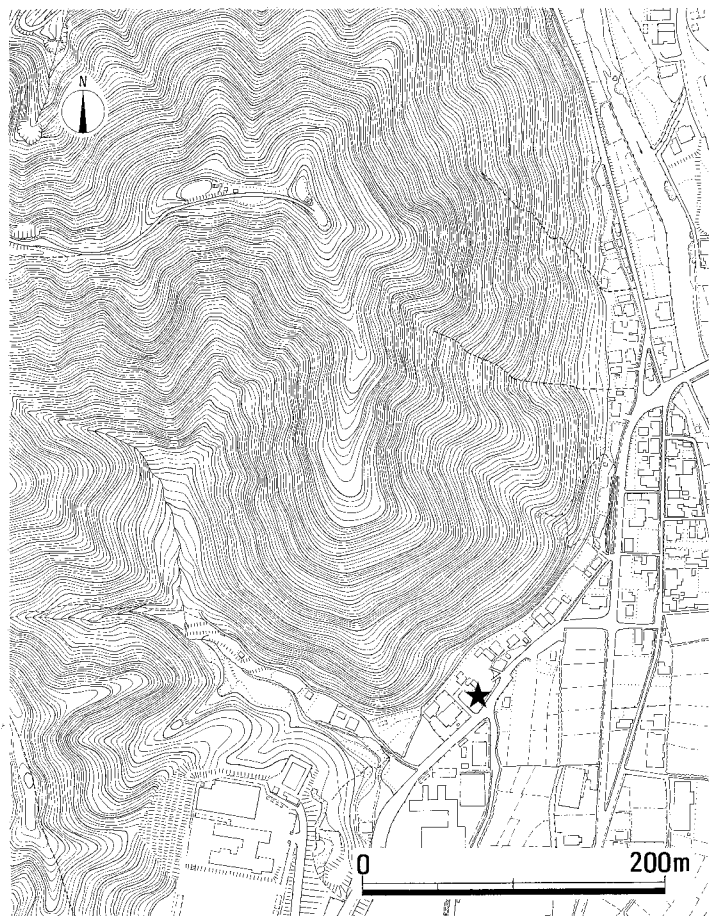
一般国道429号は倉敷市から総社市を通り、県北の津山市、美作市を經由して、兵庫県に至る主要幹線道路である。岡山県美作県民局建設部は、一般国道429号単県道路改築事業として美作市下町(旧大原町下町)の現道拡幅工事を行うこととなり、岡山県教育庁文化財課との文化財保護法に基づく協議の結果、発掘調査を実施し、記録保存の処置を執ることになった。

## 第2節 発掘調査の経過

発掘調査に入る前に、石垣の南側に堆積した約30の土と倒木の撤去を行い、6月から本調査を実施した。石垣北側の陣屋敷地内の調査では、地山面まで掘り下げると石垣が崩壊するおそれがあったため、全面調査での掘り下げは陣屋造成土上面までとし、石垣の裏込及び陣屋の造成状況については主に石垣を横断する幅約1mのトレンチを3本設定して確認した。全面調査に関しては、路線用地外に排土置き場を確保できなかったため、調査区を4分割して調査を実施したことから、細切れの調査となってしまったことは否めない。国道に面した石垣南側の調査



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 調査地位置図 (1/5,000)





第3図 調査区位置図 (1/1,000) ★：伝「陣屋の井戸」

は、児童の通学路となっていることから安全上全面調査は行わず、石垣のきわに幅50cmのトレンチを設定し、石垣底部の状況を把握するにとどめた。

発掘調査期間中には、地元の古老などに聞き取り調査を行い、陣屋の推定敷地内に「陣屋の井戸」と伝えられている井戸が2基現存していることが明らかとなった。そのうちの1基からは井戸掃除の際に鉄鍬・簀・分銅などが出土したと伝えられている。また石垣は大正から昭和初期頃に現在の場所に移築されたものであるとの話も伝わっているものの、陣屋造成土と想定している層を切る形で石垣が築造されていないため、移築されていないと考えている。ただし、陣屋造成土と想定している層が石垣移築と同時の造成土であった場合はその限りではない。

なお平成18年度に国道の拡幅工事が行われ、その時に約3m北西側に石垣が移築されている。しかしながら、石垣解体の際に石が割れるなどの諸条件が重なったため、移築された石垣は往時の姿を留めておらず、大きく改変されている。

### 第3節 発掘調査及び報告書作成の体制

平成17年度 (2005年度)		教育次長	釜瀬 司
岡山県教育委員会		文化財課	
教育長	宮野 正司	課長	芦田 和正
岡山県教育庁		参事	田村 啓介

総括副参事（埋蔵文化財班長）	平井 泰男	〈総務課〉	
主 任	小林 利晴	総括副参事（総務班長）	若林 一憲
主 事	金出地敬一	主 任	小川 紀久
岡山県古代吉備文化財センター		〈調査第二課〉	
所 長	松本 和男	課 長	島崎 東
次 長（総務課長）	内田 猛	総括副参事（第二班長）	岡本 寛久
参 事	平松 郁男		（調査担当）
参 事	高畑 知功	主 任	小嶋 善邦
			（調査・報告書担当）

## 第4節 日誌抄

平成17年6月1日（水）発掘資材搬入。	6月16日（木）3区埋め戻し終了。
6月2日（木）1区調査開始。	6月24日（金）1・2区埋め戻し終了。
6月8日（水）4区調査開始。	発掘調査現場撤収。
6月9日（木）2区調査開始・	6月30日（木）調査終了。
4区埋め戻し終了。	10月3日（月）報告書作成作業開始。
6月14日（火）3区調査開始。	10月31日（月）報告書作成作業終了。

### 文化財保護法に基づく提出書類一覧

#### 第1表 埋蔵文化財発掘の通知（法第94条）

番号	岡山県文書番号 日付	種類及び 名称	所在地	面積 (㎡)	目的	届出者	期間	主な指示事項
1	教文埋 第21号 H17.4.7	陣屋跡 下町陣屋跡	美作市下町498-6	167	道路	岡山県勝英地方振興局長 三宅健	H17.8.1～ H17.11.30	発掘調査

#### 第2表 埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

番号	文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第86号 H17.6.2	城館跡 下町陣屋跡	美作市下町498-6	40	道路	岡山県古代吉備文化財 センター所長	岡本寛久・ 小嶋善邦	H17.6.1～ H17.6.30

#### 第3表 埋蔵文化財発見通知（法第100条）

番号	岡山県文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文埋 第371号 H17.6.27	土器5箱・金属 器1箱 計6箱	美作市下町498-6 下町陣屋跡	H17.6.1～ H17.6.24	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備 文化財センター

## 第5節 報告書作成の経過

報告書作成は、平成17年10月に岡山県古代吉備文化財センターにおいて1名で実施した。まず、調査後未整理であった遺物の洗浄・注記から始め、これらの終了後土器の復元・実測・浄書・写真撮影を行った。併せて遺構の下図作成・浄書を行った。最終的に発掘調査で確認した石垣・土壇・石組みの溝等と土器・陶磁器28点、金属器2点、さらに春名家所蔵の「放火禁止定高札」と伝「陣屋の井戸」出土遺物を参考資料として掲載している。

## 第2章 遺跡をとりまく環境

岡山県美作市の大原地域（旧大原町）は、岡山県の北東端部に位置し、東は県境を挟んで兵庫県佐用郡佐用町に接し、北接する西粟倉村を介して鳥取県境にも近距離にある。また、中国山地脊梁部の南に位置することから、旧大原町域には標高724.2mのツズラ山、標高583.6mの瀧山以下、300～500m級の山々が連なり、面積の約55万㎡のうち実に75%が山林によって占められている。

吉井川水系の北東部を構成する最大の支流である吉野川は、英田郡西粟倉村大茅<sup>おおがや</sup>の北東に所在する岡山と鳥取の県境の若杉峠に源を発し、美作市内を南南西に流れて赤磐市周匝<sup>すさい</sup>で吉井川に合流する。この吉野川は、旧大原町の山塊を東西に分断するように下庄町までほぼ直線的に南下し、そこで緩やかに湾曲して旧作東町に流入する。樹枝状に展開する谷間からは、黒谷川・後山川・宮本川・川上川・大滝川など小河川が奔流し、吉野川へと注ぎ込んでいる。

旧大原町の平野部は、これらの中小河川沿いに形成された谷底平野を主体とし、地形に制約されて狭長なものが多いなかで、吉野川流域には胃袋状を呈するやや広い平野が散在的に認められる。特に中心部の古町から中町にかけての周辺と今岡から下庄町の地域には、吉野川を挟んでそれぞれ長さ1km・幅500mほどの平野が形成されており、吉野川流域の中でも比較的まとまった小盆地状の地形をなしている。下流域の大石から壬生<sup>みぶ</sup>を経て川戸に至る地域にも、吉野川沿いに細い平野が展開するが、急峻な山塊が近くにせまり、吉野川流域のだけの狭長な平野となっている。

以下、旧大原町の歴史と遺跡について時代順に簡略にまとめることとする。

現在のところ、旧石器時代の遺跡や遺物は確認されていない。現状では尾崎遺跡<sup>(1)</sup>から出土した、縄文時代草創期の神子柴型石斧が最古の遺物である。次に古い遺物は、鳥取自動車道関連発掘調査で調査を行った、中町B遺跡<sup>(2)</sup>の縄文時代前期初頭の羽鳥下層式の特徴が認められる土器が挙げられる。縄文時代後期の遺物は中町B遺跡<sup>(3)</sup>や尾崎遺跡<sup>(4)</sup>、縄文時代晩期の遺物は川戸古墳群<sup>(5)</sup>や今岡廃寺<sup>(6)</sup>から出土している。

弥生時代については、旧大原町内で20数か所の遺物散布地が確認されている。現在のところ前期の遺構や遺物は発見されていない。発掘調査で集落の存在が明らかになったのは、鳥取自動車道関連発掘調査での今岡中山遺跡<sup>(7)</sup>と中町B遺跡<sup>(8)</sup>が初めてであり、その他に遺構は確認されていないが川戸古墳群や池が平遺跡<sup>(9)</sup>で遺物が出土している。

古墳時代の集落は、尾崎遺跡で竪穴住居が1軒確認されているものの集落の様相としては現在のところ不明である。墳墓である古墳は旧大原町内で約80基発見されている。前～中期古墳としては、箱式石棺を埋葬施設とする山の後2号墳<sup>(10)</sup>、山頂に立地して墳丘が低平な赤田古墳群・桂坪古墳群などがある。このうち桂坪12号墳は、全長32mを測る前方後円墳で、当該期の首長墳と考えられる。後期古墳は40基ほど確認されており、その多くは直径10mほどの小規模な円墳である。そのうち特筆されるものが、発掘調査が実施された川戸古墳群である。特に2号墳は6世紀末～7世紀初頭に築造された全長12.3mの横穴式石室の大型方墳で、金銅装馬具一式や銀象蕨鏝の大刀など秀逸な副葬品<sup>(11)</sup>が出土している。また、この地域の後期古墳の特色として、美作で盛行する陶棺が分布するとともに、播磨の影響を受けた組合式石棺が存在することである。野形2号墳から出土した7世紀前葉の陶棺が

東京国立博物館に所蔵され<sup>(12)</sup>、釜の口1号墳<sup>(13)</sup>や築出し古墳<sup>(14)</sup>でその石棺が採用されていることが挙げられる。

7世紀後半の白鳳時代に吉備は分割され、後の英田郡の前身となる英多郡(評)<sup>(15)</sup>が成立する。この時期には、英多郡には北から今岡廃寺・大海廃寺・楢原廃寺・江見廃寺・竹田廃寺・土居廃寺が次々に建立される。地方において一郡に6寺が建立される例は全国的にも珍しく、この地域が畿内中央政権と密接なつながりを有していたことの証左となっている。発掘調査が実施されたものとしては、旧作東町山手に所在する大海廃寺があり、7世紀後半に創建された英多郡最古の寺院であることが判明している<sup>(16)</sup>。

奈良時代初頭の和銅6年(713年)には、備前国から英多郡ほか6郡が割かれて美作国が新しく誕生する。旧大原町域は、北から英多郡大原郷・讚甘郷<sup>(さのも)</sup>・大野郷・吉野郷・粟井郷に比定される。発掘調査が実施された今岡廃寺では、奈良～平安時代にかけての遺構や遺物が大量に確認され、今岡廃寺一帯が英多郡における拠点の一つであることが明らかとなった<sup>(17)</sup>。また、8個体の骨蔵器がこの地域から発見され<sup>(18)</sup>、地方における新たな葬制受容の様相をうかがわせる資料である。さらに、今岡中山遺跡では古代の堅穴住居が検出されている<sup>(19)</sup>。

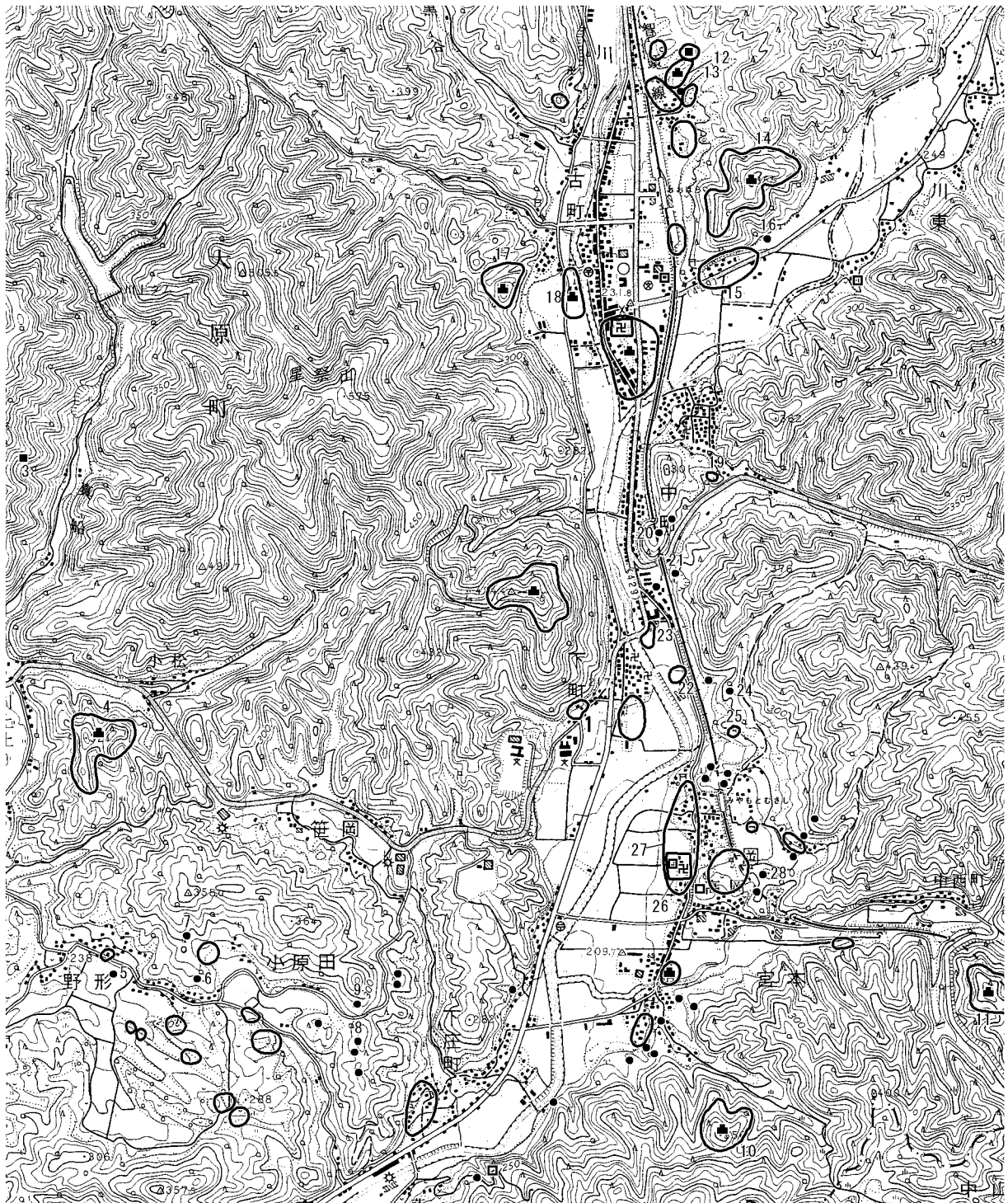
この地域の経済基盤を考える上で欠かせないものに鉄生産がある。特に古代においては美作国は、調鉄の貢納国であり、平城宮跡からは「英多里鉄<sup>(20)</sup>」、「美作国英多郡大野里鉄一連<sup>(21)</sup>」の木簡が出土している。旧大原町内では、現在のところ製鉄遺跡は明確ではないが、先述の大野里に比定される旧大原町野形で、須恵器片とともに鉄滓が採取されている。また、壬生所在のナイゲ遺跡<sup>(22)</sup>では、小形の横口付製炭窯が検出されている。この種の炭窯は製鉄遺跡に伴うことが知られているから、近接地に製鉄遺跡が所在している可能性が高い。

旧大原町の地域は、山陽と山陰を結ぶ交通路として重要な位置を占めており、古代には播磨と因幡を結ぶ因幡道が整備される。因幡道は現在の兵庫県佐用郡佐用町から釜坂峠を越えて美作市宮本に入り、今岡廃寺の近くを通過後、吉野川に沿ってそのまま北上し、志戸坂峠を越えて鳥取県に至るルートが想定されている。

平安時代末～鎌倉時代にかけて、前代の郷名を引き継いで大原保・讚甘荘・大野荘・吉野保が成立する。南北朝の動乱期に、美作国では播磨の赤松氏と伯耆の山名氏が覇権を争い、旧大原町域は赤松氏が支配権を握った。戦国期には在地武士の新免氏が台頭し、北の尼子氏・西の毛利氏と攻防を繰り返した。こうした動乱の時代を物語る山城は、旧大原町内の10数か所で確認されており、赤松氏が拠点とした小原山王山城、新免氏が拠点とした竹山城などの大規模な城郭のほか、中小の城郭が吉野川流域沿いに点在している。これらの城郭が築かれた背景には、戦国期になってもこの地域が、中国山地山間部における交通の要衝であったからであろう。

中世の遺跡で発掘調査が実施されたものに、川上所在の美土路遺跡<sup>(23)</sup>がある。圃場整備事業に伴う発掘調査で、溝・土壙・柱穴などが検出され、勝間田焼・備前焼・東播系須恵器・土師質土器・瓦質土器とともに、青白磁の合子を含む中国産磁器が多く出土している。また、川上所在の真船遺跡<sup>(24)</sup>では、砂防工事中に五銚杵・五銚鈴・火舎・花瓶・六器・飯食器・二器・打鳴器の法具一式が計22点も出土しており、密教法具の埋納事例として注目される。また、正平4年(1349年)造立の沢田宝篋印塔、正平11年(1356年)造立の粟野宝篋印塔のような石塔の優品が現存している。

近世に入り、旧大原町域は津山藩領を経て幕府領となるものの、18世紀後半以降幕府領や土浦藩・



- |          |            |            |           |
|----------|------------|------------|-----------|
| 1 下町陣屋跡  | 8 才の凧 1号墳  | 15 尾崎遺跡    | 22 中町B遺跡  |
| 2 竹山城跡   | 9 才の凧 2号墳  | 16 突出し古墳   | 23 中町C遺跡  |
| 3 真船遺跡   | 10 小山城跡    | 17 会下城跡    | 24 穴が辻古墳  |
| 4 小淵城跡   | 11 比久尼城跡   | 18 縣の構     | 25 今岡D遺跡  |
| 5 野形 1号墳 | 12 八幡山城跡   | 19 中町A遺跡   | 26 今岡廃寺   |
| 6 野形 2号墳 | 13 八幡山古墳   | 20 山の後 1号墳 | 27 今岡遺跡   |
| 7 野形 3号墳 | 14 小原山王山城跡 | 21 山の後 2号墳 | 28 今岡 1号墳 |

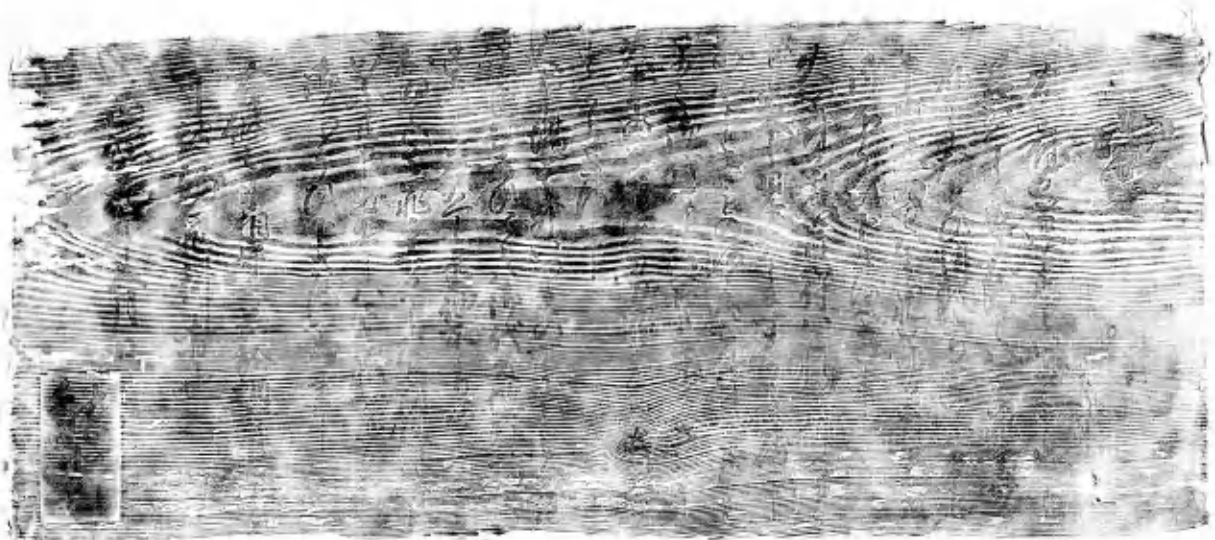
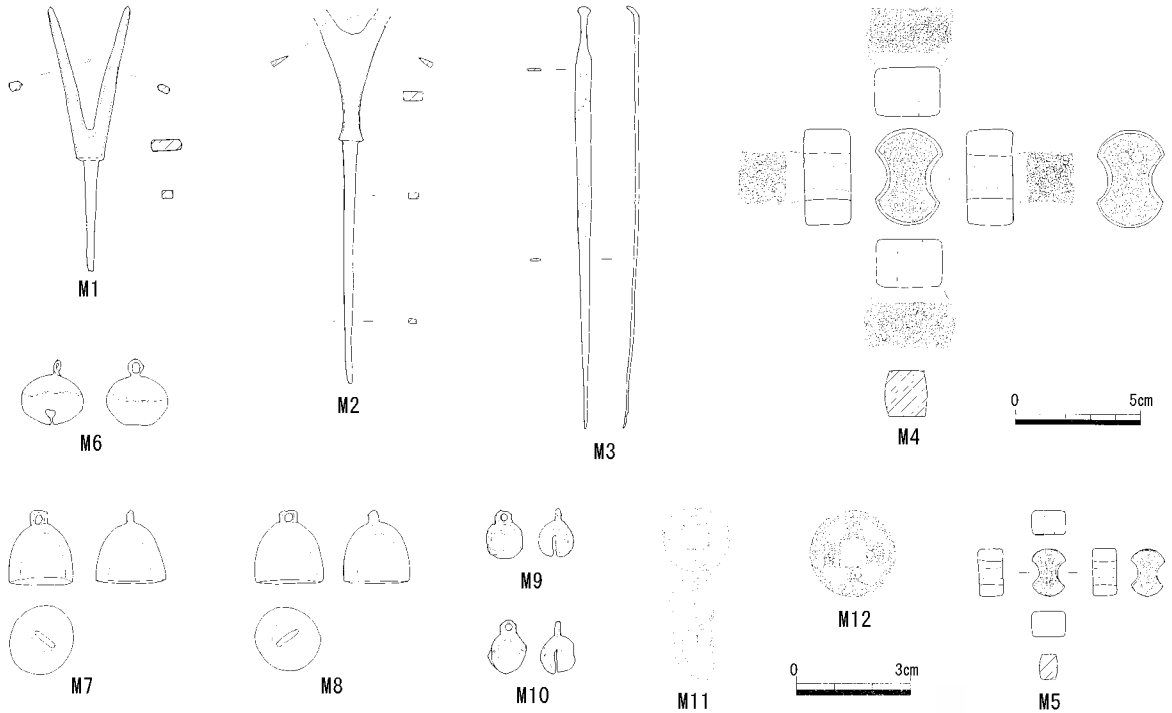
第4図 下町陣屋跡と周辺遺跡分布図 (1/25,000)

佐倉藩・津山藩・明石藩などの飛地領として分割され、さらにその飛地領の支配藩が変わるなど錯綜した状況で明治維新を迎える。当地域は因幡鳥取藩主の参勤交代路として因幡街道が整備され、古町には小原宿が設けられた。現在も本陣・脇本陣を中心に伝統的な町並みが保存されており、往時の賑わいを今に伝えている。

なお、第5図に掲載している遺物は、第3図に図示している「陣屋の井戸」と伝えられている井戸Bから出土した金属器及びこの井戸の所有者である春名伸吾氏の家に伝わっている「放火禁止定高札」の拓影及びその文章である。

## 註

- (1) 岡山県古代吉備文化財センター『鳥取自動車道遺跡発掘ニュース第2号』 2006
- (2) 岡山県古代吉備文化財センター編『美作・大原昔絵巻』 2006
- (3) 2と同じ
- (4) 上梶 武「尾崎遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』36 岡山県教育委員会 2006
- (5) 宇垣匡雅『川戸古墳群発掘調査報告書』岡山県大原町教育委員会 1995
- (6) 佐藤寛介「今岡廃寺」『大原町埋蔵文化財発掘調査報告』2 岡山県大原町教育委員会 2002
- (7) 内藤善史・米田克彦「今岡中山遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』35 岡山県教育委員会 2005
- (8) 石田爲成「中町B遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』35 岡山県教育委員会 2005
- (9) 大原町史編纂委員会「池が平の住居跡」『大原町史』地区史編 大原町 2001
- (10) 栗野克己・福田正継「山の後2号墳発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』8 岡山県教育委員会 1978
- (11) 5と同じ
- (12) 岡山県立博物館学芸員佐藤寛介氏のご教示による。
- (13) 5文献に実測図が掲載されている。
- (14) 岡田 博「築出し古墳」『岡山県埋蔵文化財報告』15 岡山県教育委員会 1985  
平井 勝「岡山県大原町築出し古墳の小形石棺」『古代吉備』第11集 古代吉備研究会 1989
- (15) 旧大原町が所在した英田郡は、古代は英多郡、中世以降は英田郡と表記される。本書では、古代の行政域を示す場合だけに英多郡を使い、それ以降は英田郡とする。
- (16) 正岡陸夫・岡本寛久「大海廃寺緊急発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財報告』26 岡山県教育委員会 1978  
岡本寛久「大海廃寺緊急発掘調査報告書Ⅱ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』33 岡山県教育委員会 1979
- (17) 6と同じ
- (18) 美作市教育委員会で保管。すべて薬壺形の須恵器で、8～9世紀代のものと考えられる。
- (19) 7と同じ
- (20) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』12 奈良国立文化財研究所 1978
- (21) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』21 奈良国立文化財研究所 1989
- (22) 亀山行雄「壬生・ナイゲ窯跡」『岡山県埋蔵文化財報告』24 岡山県教育委員会 1994
- (23) 山磨康平「美土路遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』64 岡山県教育委員会 1987
- (24) 発見当初は新畑遺跡とされていた。三輪嘉六「新畑遺跡出土の密教法具の研究」『MUSEUM(東京国立博物館美術誌)』No.311 東京国立博物館 1977



W1

定

一火を付る者を志らハ早々申出へし  
若かくし置にたゐてハ其罪重かる  
遍したとひ同類たりといふとも  
申出るにたゐてハ其罪をゆるされ急度  
御ほうひ下さるへき事

一火を付る者を見付ハこれを捕へ早々  
申出へし見のかしにすへからさる事  
あやしきものあらハせんさくをとけて  
早々御代官地頭へ召連來るへき事

火事之節鐘長刀刀脇指等ぬき身に  
すへからさる事

火事場其外いつれ之所にても金銀  
諸色ひろひ取らハ御代官地頭持參  
すへし若隠し置他所よりあらハるゝに

おゐては其罪重かるへしたとひ同類たりと  
いふ共申出輩者其罪をゆるされ  
御ほうひ下さるへき事

右條々可相守之若於相背者  
可被行罪科者也

正徳元年五月日

能登

第5図 春名家所蔵 伝「陣屋の井戸」出土遺物及び「高札」(1/3・1/2・1/7)

## 第3章 調査の概要

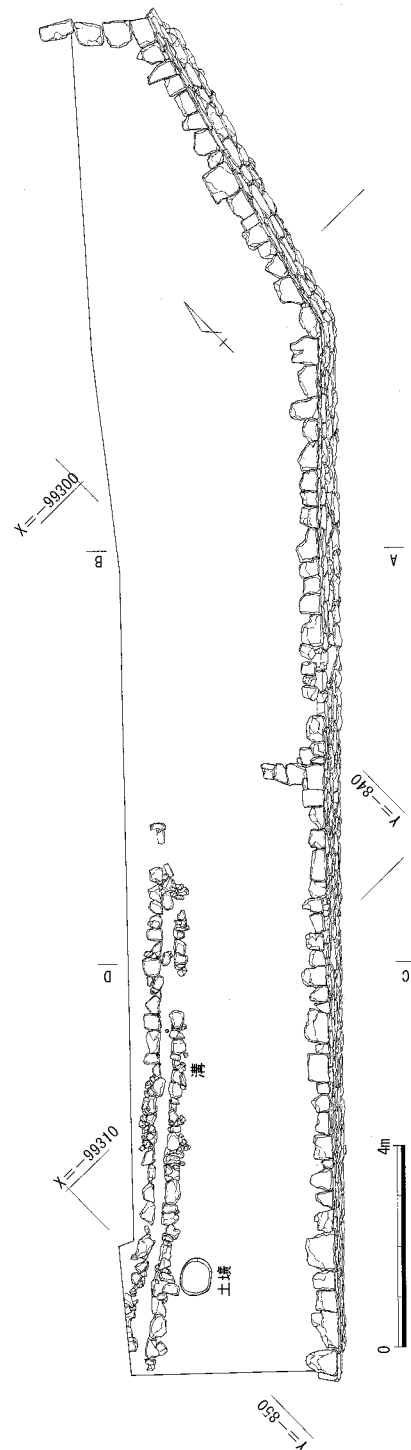
### 第1節 調査区の概要

調査地は竹山城が所在している山塊の南側裾部、標高約220mの場所に位置しており、吉野川によって形成された平野部からは約10mの比高差を測る。この場所は円成寺や西光寺が所在している下町地区の町並みから約200m西側に位置している。

陣屋敷地内及び北東側は、大正年間に芝居小屋が、昭和6年に片倉製糸の稚蚕場が建設されたことにより大きく改変・削平を受けたようである。特に陣屋石垣の北東部は稚蚕場等の石垣築造により消失している。また、陣屋の南西側は個人住宅建設により往時の姿を留めていない。

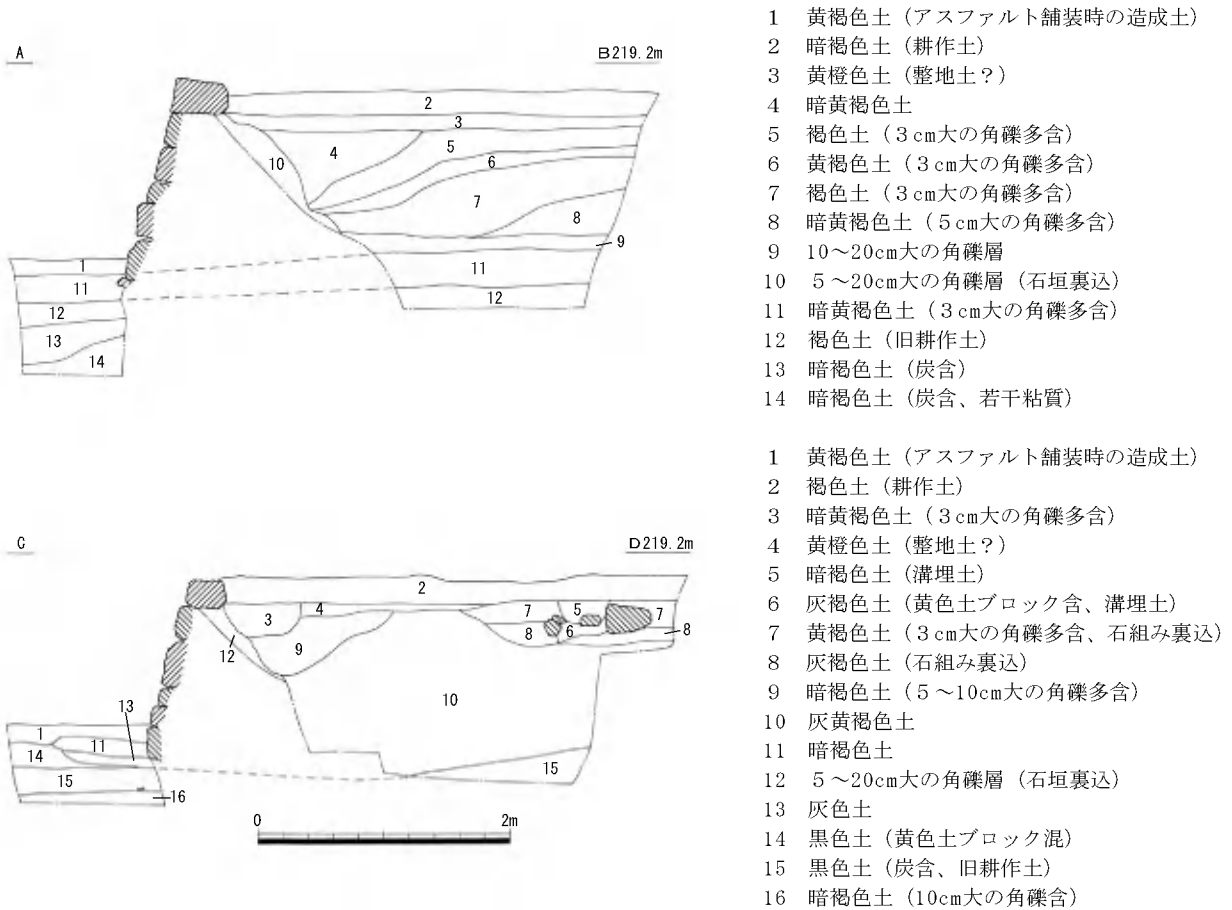
調査区の現状は畑作地であり、その耕作土を除去すると、整地土と想定される固く締まった黄橙色土が調査区南西側で検出される。この黄橙色土の下層からは、陣屋造成土層及び石垣裏込層が検出され、陣屋造成土層は角礫を多量に含んだ土で、その厚さは約1.5mを測る。石垣裏込層は5～20cm大の角礫が用いられていた。これら陣屋造成土層及び石垣裏込層の下層では旧耕作土（旧表土）と推測される層が確認され、この層中から12の土師器高杯や14の備前焼播鉢が出土している。旧耕作土層の標高はC-D断面西端で217.5m前後、東端で217.3m前後を測り、陣屋築造以前の地形は北西から南東へと緩やかに傾斜していたようである。旧耕作土から下層の状況についてであるが、いわゆる地山面まで掘り下げると石垣の崩落が想定されたため、地山面の確認を行わなかった。

陣屋敷地内は削平が著しく、建物と想定される遺構は確認されなかったが、雨落ち溝と推測される石組みの溝とそれに隣接する土壇、さらに石垣排水穴に付属する石敷きを検出した。遺物は肥前陶磁器をはじめ、備前焼等が出土した。また、小片であったため掲載していないが、15～16世紀代の朝鮮陶器皿が出土しており、竹山城との関係を想起させる。



第6図 調査区遺構配置図（1/150）





第7図 トレンチ土層断面図 (1/60)

## 第2節 検出された遺構・遺物

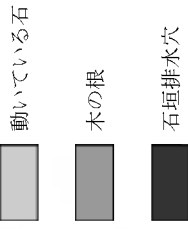
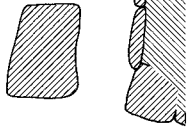
### 1 石垣 (第6~11図、図版2~5)

東西両側が消失しているが、現存長27.9mを測り、南西端部で四段、北東端部で六段積みされている石垣である。第8図の東端部の石垣の石がかなり飛び出ているが、これは木の根が石垣の中にまで入り込んでしまったため、石が大きく動いているからである。

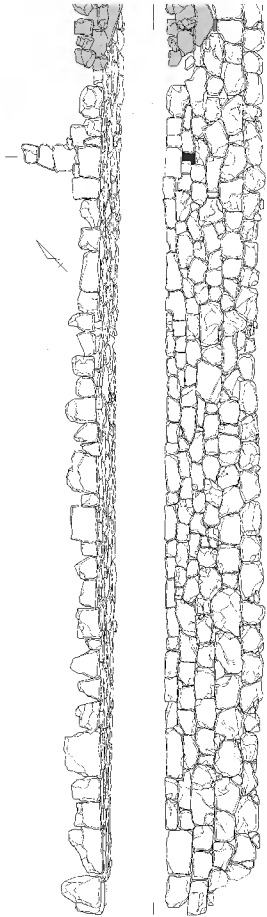
石垣は、南西端部から約20.9mの地点においてやや雑な算木積みがなされ、約27度北側に屈曲して構築されている。また、北東端部で西側へ約115度屈曲しているが、これらの石の下には石垣が組まれておらず直接表土層の上に置かれていることや、石垣北東端部の上から四段目がさらに北東側に飛び出していること等から、後世の改築によるものであろう。よって石垣は長さが不明なものの、本来そのまま北側に続いていたようである。

石垣の石は上から二段目まではほぼ(長)方形に形を整えられ、切込ハギとよべるものであるが、下段に行くにしたがいその加工は粗くなり、(長)方形を呈するものは少なくなる。石垣の積み方は、二つの石の上に互い違いに石を積む布積みが基本となっている。天端石の海拔高は約219.1mでほぼ一定しているが、地形に合わせるように根石から天端石までの高さは北東端部で約1.8m、南西端部で約1.5mを測る。石垣中央部付近の上から二段目には排水穴と想定される約20×15cmを測る空白域

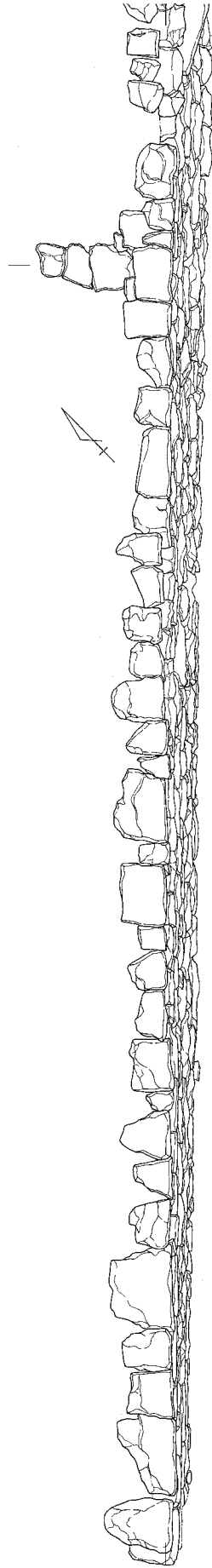
219. 2m



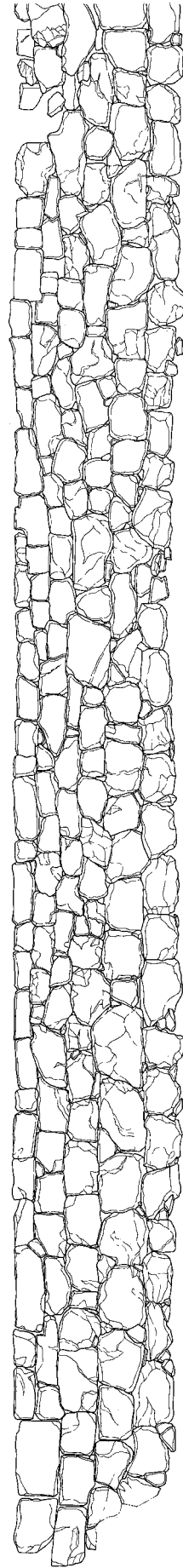
第10図 排水穴石敷き断面図 (1/30)



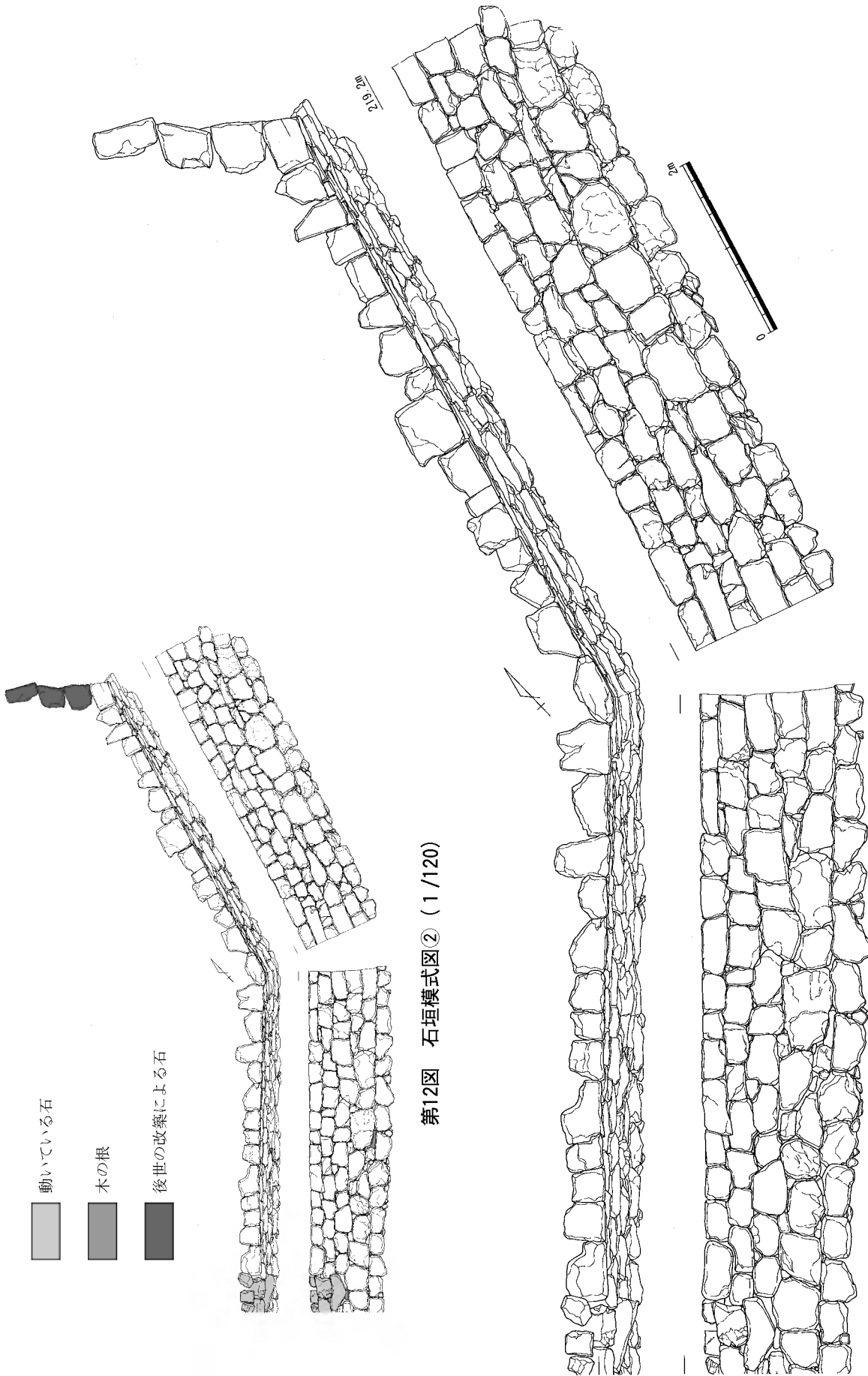
第9図 石垣模式図① (1/120)



219. 2m



第8図 石垣① (1/60)



第12図 石垣模式図② (1/120)

第11図 石垣② (1/60)

が認められ、この排水穴から陣屋敷地内に向けて、一辺30～50cm大の扁平な石が4個敷かれていた。これらの石の上には、排水穴に向けた導水施設が構築されていたと想定される。石垣は下部では勾配が緩く、上部では勾配がきつく築造されており、規模は小さいものの宮勾配を呈する。石垣根石の下には、胴木などの基礎構造は認められなかった。これは石垣の高さが低く、また地盤が安定しているために不等沈下のおそれなかったためと思われる。なお、石垣に用いられている石の石材鑑定を実施した結果、圧碎花崗岩と流紋岩の鑑定結果が得られている。

## 2 土壙 (第6・13図)

溝の南西端部南側で検出された土壙で、溝の石組み掘り方を切っている。平面形はやや楕円形を呈し、規模は長軸78cm、短軸60cm、検出面からの深さ43cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦であった。

埋土中から肥前磁器碗の小片が1点出土している。

## 3 溝 (第6・14図、図版5・7)

調査区南西側、石垣とほぼ併行している石組みの溝で、第14図の方位の箇所はトレンチ調査によって石組みが消失しているものの現存長10.9m、石組み内幅20cm前後を測る。造成土を掘り下げて石組みがなされ、用いられている石の大きさは15～50cm大と多様である。石組みは現状で一ないし二段積みであるが、石組み上端の高さが不揃いであり、さらに石組みから転落したと思われる石が溝内から出土していることなどから、本来は二～三段積みであり、石組み上端の高さは石垣天端石とほぼ同じ219.1m前後であったものと推測される。溝底は南西端で218.8m前後、北東端で218.6m前後を測る。

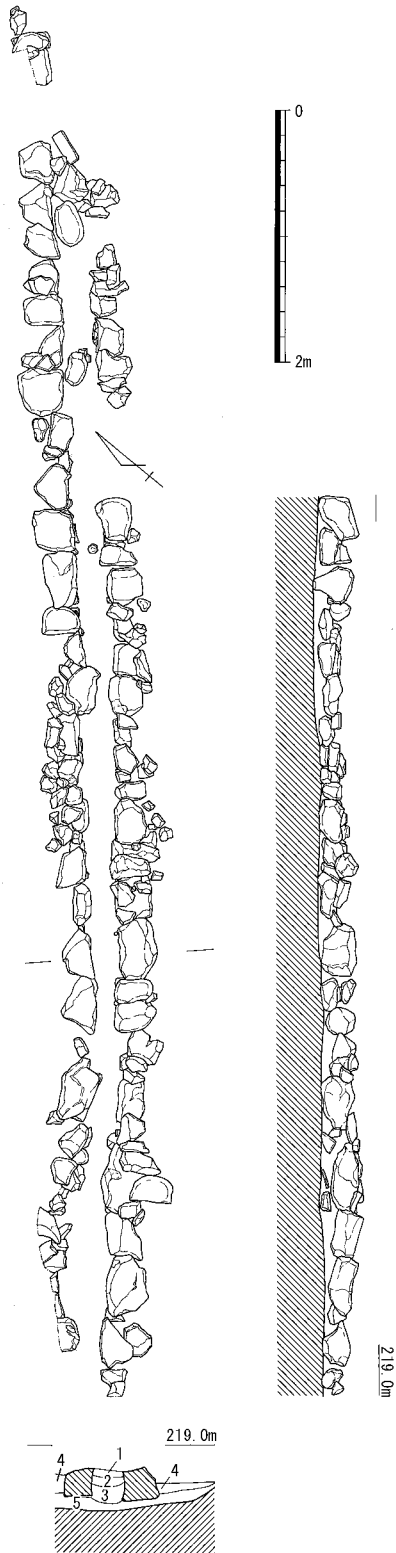
さて、この溝の北東端部は木の根の攪乱及び後世の削平を受けている。よって溝がこのまま北東に続いていくのか、または90度角度を変えて北西ないしは南東に向かうのか確認できなかった。しかし、石垣排水穴より北東側及び第7図のA-B断面においては石組み掘り方が認められなかったため、石垣排水穴より北東側には続いていかないと推測される。また、石垣排水穴と有機的な関係が想定されるが、攪乱及び削平を受けているため断定はできない。

遺物は溝内から8・9の磁器とM13の寛永通宝が、石組み掘り方内からは1～7・10・11の陶磁器や備前焼が出土している。8・9は18世紀～19世紀初頭の肥前染付磁器碗・蓋で、9には外面に扇に松竹梅の絵が描かれている。M13の寛永通宝の裏面には「文」の字が認められる。1は関西系陶器の土瓶の口、2・3は18世紀代の京焼の色絵陶器である。4～7・10は肥前及び肥前系の染付磁器碗及び蓋であり、いずれも18世紀後半～19世紀初頭の時期に比定される。溝内出土の磁器の年代が文献から得られる陣屋の存続時期より古いものの、この溝の石組みが石垣と併行して構築されていることから陣屋建物に付属する雨落ち溝と想定される。

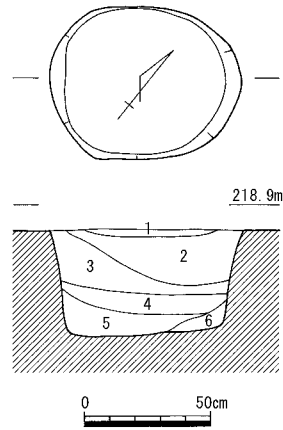
## 4 包含層出土遺物 (第15～17図、図版7)

本報告書では、包含層出土遺物として陣屋造成土層及び石垣裏込層下層の旧耕作土(第7図A-B断面第12～14層、C-D断面第15・16層)内、陣屋造成土(第7図A-B断面第4～11層、C-D断面第9・10層)内、表土及び耕作土(第7図第2層)内で分けて掲載した。

第15図は旧耕作土内から出土した遺物である。12は古墳時代の土師器高杯、13は口縁部が欠損して

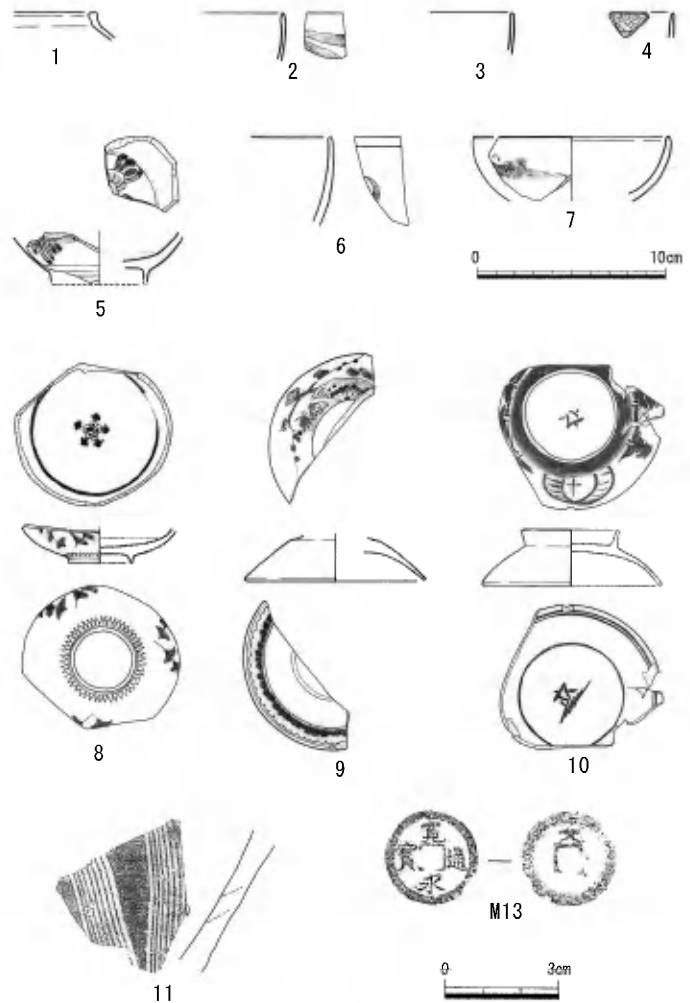


- 1 暗褐色土 (焼土含)
- 2 黄褐色土
- 3 暗黄褐色土 (炭少含)
- 4 黄褐色土 (3 cm大の角礫多含)
- 5 灰褐色土

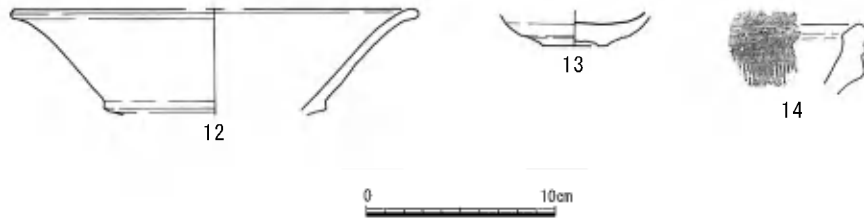


- 1 暗褐色土 (5 cm大の角礫多含)
- 2 黄褐色土 (3 cm大の角礫多含)
- 3 黄色土
- 4 暗褐色土
- 5 黄色土
- 6 暗褐色土

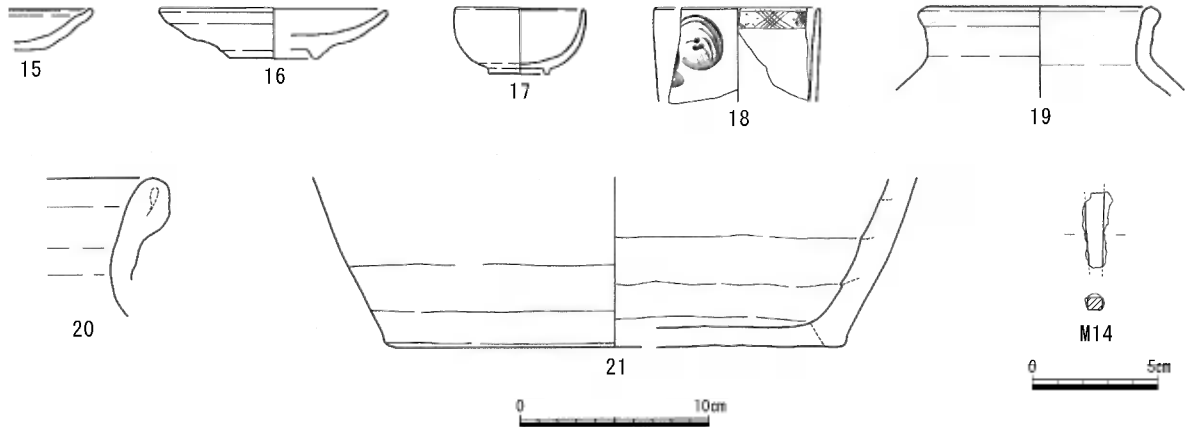
第13図 土壇 (1/30)



第14図 溝 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

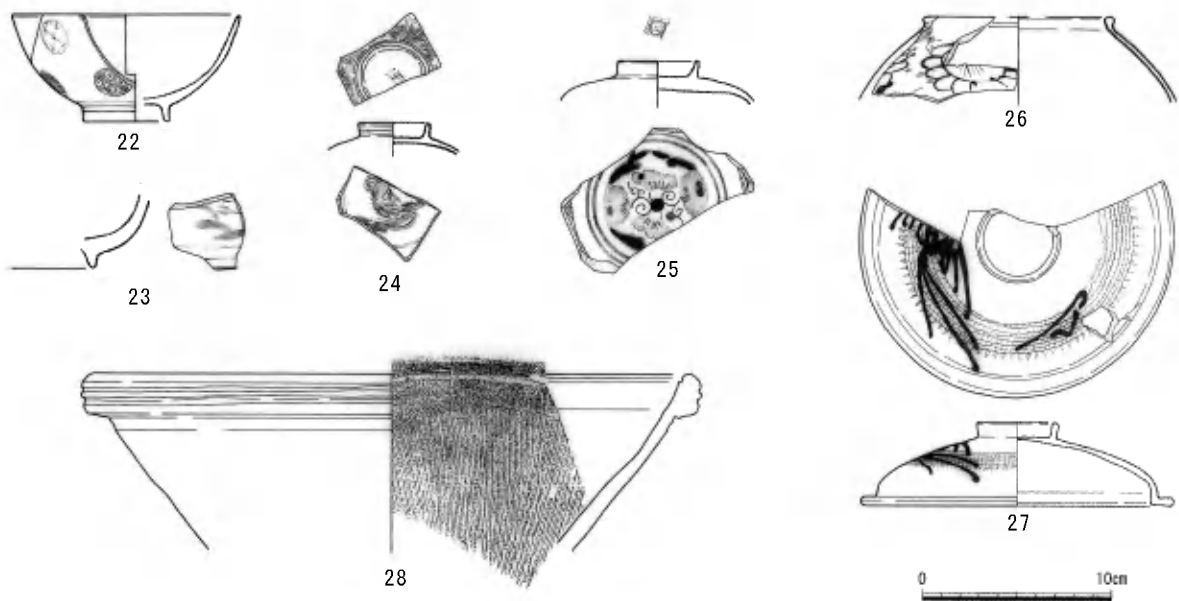


第15図 旧耕作土（旧表土）出土遺物（1/4）



第16図 陣屋造成土出土遺物（1/4・1/3）

いる17世紀初頭の灰釉陶器の碗か皿である。14は備前焼天保窯出現直前の時期に比定される備前焼播鉢の口縁部である。第16図には造成土内から出土している遺物を掲載した。15は吉備系土師器皿、16は肥前灰釉陶器皿である。17は京焼と想定される小杯、18は丸文が施された肥前染付磁器猪口である。19～21は備前焼壺である。第17図は表土及び耕作土中から出土した遺物である。22・23は肥前染付磁器碗、24は内面に麒麟が描かれている染付蓋である。25は肥前青磁の染付蓋で二重の方形枠内に「福」字の銘款が認められる。26・27は19世紀の関西系陶器である。28は18世紀後半頃の備前焼播鉢である。



第17図 表土・耕作土出土遺物（1/4）

## 第4章 まとめ

今回発掘調査を実施した下町陣屋跡は、陣屋敷地内については石垣から約3m程しか発掘調査が実施できず、また陣屋の絵図等が管見の限りでは確認されなかったため、陣屋内の状況については不明と言わざるを得ない。さらに、現存している石垣についても南西・北東両側はすでに消失している状況である。よって、少ないながらも今回の発掘調査で判明したことと下町陣屋に関して文献から得られた内容を整理し、まとめとしたい。その前に江戸時代の下町村領主の変遷及びトピックス的な出来事について簡単に略年表に示す。なお、最後に春名家所蔵の遺物について若干の説明をおこなう。

第4表 下町村略年表

年号	西暦	主な出来事	領主	出典
慶長8年	1603	津山藩主森忠政美作国を領す。	津山藩	『岡山県史』ほか
元禄10年	1697	津山藩森氏断絶。幕府領となる。	幕府	『岡山県史』ほか
元禄11年	1698	代官内山七兵衛に吉野郡一円及び英田郡（田原・山城・鯨・瀬戸・平野・澤・三海田）、勝北郡等3郡を治めさせる。	幕府	『英田郡誌考』
享保18年	1733	古町村の大火により古町代官所が焼失。下町村に代官所を移す。	幕府	『英田郡誌考』 『美作略史』ほか
享保19年	1734	曾根五兵衛（備中国笠岡の代官）が下町代官を兼務する。	幕府	『美作略史』ほか
寛保元年	1741	花井庄九郎が代官となるが、直ぐに死亡したため、平岡彦兵衛が兼務する。	幕府	『美作略史』ほか
寛保2年	1742	川田玄蕃が代官となる。	幕府	『美作略史』ほか
延享2年	1745	吉野（五名村等）・勝北（上野田村等）・東北条（知和・阿波村等）・西西条（奥津・富西谷・羽出・至孝野村等）・西北条（寺和田村等）・大庭（久世・下和村等）6郡の内73,000石余が鳥取藩の預かり地となる。 鳥取藩主松平宗恭（原文ママ、宗泰の間違いか？）の臣、竹田治太郎・堀善十郎・犬口權十郎、下町村にて管地する。	幕府 （鳥取藩）	『美作略史』 『英田郡誌考』ほか
延享4年	1747	土浦藩主土屋篤直、吉野郡・勝北郡（53村・19,080石）を領し、陣屋を下町村に置く。 幕府代官所が廃止される。 下町村等が土浦藩領となったため、鳥取藩預かり地を下町村で管治していた竹田治太郎等は久世村に移る。	土浦藩	『英田郡誌考』 『美作略史』 『土浦市史』ほか
天明2年	1782	土浦藩は、大庄屋2人（近長村甲田猪吉、福井村井上勘三郎）を撰用する。	土浦藩	『美作略史』
寛政2年	1790	土浦藩所領の吉野郡の内、古町・長尾・板根村以外が幕府領となる。	幕府	『英田郡誌考』 『土浦市史』ほか
寛政4年	1792	土浦藩は、下町村に置いていた陣屋を近長村（津山市）に移す。	幕府	『土浦市史』 『美作略史』
文化14年	1817	龍野藩の預かり地となる？	幕府 （龍野藩）	『明石名勝古事談』
文政5年	1822	下町陣屋代官亀田清助の在勤の継続願いを大阪高津役所へ差し出す。	幕府 （龍野藩）	『大原町の百年』
天保13年	1842	明石藩主松平齊宜吉野郡（龍野藩主脇坂安宅所管の海内・桑野・水根・青木・石井・下町および代官大草太郎左衛門所管の川西・筏津・太田・中谷・影石村等）を領す（44村・9,850石）。 下町村に陣屋を置く（明石藩郡代所の所管）。 大庄屋1人（川西村高畑鐵右衛門）を撰任する。	明石藩	『明石市史』 『美作略史』ほか
明治元年	1868	下町陣屋廃止。	明石藩	『明石市史』ほか

表に示しているとおおり、下町村は享保18年（1733）の古町村の大火の後、幕府・土浦藩・明石藩の陣屋（代官所）が置かれ、吉野郡一円の政治の中心地であった。しかしながら、一時期代官がいなかったことが『東作誌』に記載されている<sup>(1)</sup>。

### 陣屋の築造時期

今回、石垣を横断するトレンチ調査によって旧耕作土（旧表土）から19世紀初頭の備前焼播鉢口縁部が、また陣屋造成土内からは一番新しいもので18世紀後半～19世紀前半の間に製作された肥前陶磁器が出土している。これらの遺物から、陣屋は19世紀前半以降に明石藩ないしは龍野藩によって築造されたと判断されるが、龍野藩は下町村等を預かり地とした時にはすでにその他の近隣の村々を管治していることから、新たに下町村に陣屋を築造する必要はなかったと思われる。よって、明石藩が下町村以下吉野郡の村々を管治するにあたって調査地に陣屋を築造したものと考えられる。このことは、『明石名勝故事談』に「・・・陣屋は元は此地に明石儀助という者あり明石を浪人して来り下町に家宅を建つ此人の屋號は丸屋といふ子孫今猶あり此人の家宅が陣屋と成りしなり・・・」とあり、明石儀助の屋敷地を陣屋としたと記載されていることから言えよう。

### 陣屋の規模及び建物配置

陣屋の敷地は、『明石名勝古事談』に記載されている広さ<sup>(2)</sup>や現在の地形及び古老などからの聞き取り調査から、第3図のアミフセ部の範囲と想定される。よって稚蚕場等による石垣北東端部の消失は、それほど大きなものではないと考えられる。

陣屋内の建物配置に関しては、先に述べた状況であるため手がかりが皆無であるものの、牢屋が置かれていたことが『明石名勝古事談』に記載されている<sup>(3)</sup>。また、「陣屋の井戸」と伝えられている井戸が2基現存している。一つは陣屋推定敷地内の北隅（第3図A）、もう一つは中央やや北側（第3図B）に位置しており、両者とも石組みの井戸で現在でも水を湛えていた。さらに、今回の発掘調査で検出した雨落ち溝と想定される溝から、溝の北側には何かしらの建物の存在が想定される。

### 明石藩陣屋以前の幕府及び各藩陣屋の所在地

先に述べたとおり、明石藩は以前の陣屋を利用せず、新たに陣屋を築造したと考える。では、明石藩以前の陣屋（代官所）は何処にあったのであろうか。一口に陣屋と言っても、代官が派遣され陣屋を普請・作事し陣屋町を形成するものから、在地の名主・庄屋に代官職を委託してその主屋内に陣屋機能を敷設するものまで多様である。よって陣屋町を形成しない場合、陣屋の所在地に関しては著しく不明な状況であり、文献等に明確に記載されていない限り伝聞等から推測するしかない。現在も残っている「字」・「小字」から推測されることは、字名が「西町屋敷」や「東町屋敷」であり、さらにその中の小字名が「町屋敷」・「居屋敷」・「屋敷」である県道5号線東側の円成寺や西光寺が所在している地域が候補地の一つとして挙げられよう。

### 春名家所蔵の高札及び伝「陣屋の井戸」出土遺物について

第5図に図示した遺物について若干の説明を加えたい。M1～M12は春名氏敷地内の伝「陣屋の井戸」内から出土した金属器、W1は春名家に伝わっている「放火禁止定高札」である。

M1・2は鉄鏃、M3は陰刻が施されている簪である。M4・5は分銅であり、M4の表面には後藤家家紋の「五三桐」が、裏面には「後藤たがね点書」や「極」・「今」・「花押」の刻印がなされ、さらに表・裏・側面には「桐」の刻印が多数施されている。M4は30目、M5は4匁の重量に相当する。M6～M10は鈴及びび鐸である。これらは仏具関係のものと推測される。M11は円形の銭の下に刀



形を配した形状で、円形の方穿上下に「一刀」、刀形部分には「平五千」の文字が認められる。このような形態には、いわゆる王莽銭の「一刀平五千」と呼ばれる貨幣があるが、その真偽は確認できず、模造品の可能性も想定される。M12は寛永通宝である。W1の「放火禁止定高札」は、『徳川禁令考後聚』第一帙に記載されているものと比較するとかなり省略された内容であるのみならず、条文の順番も入れかえられている<sup>(4)</sup>。また文章の最後は同文献によると「奉行」となっているが、今回のものはその部分が一段削られて「能登」となっている。これは本来「奉行」と書かれていたものが、この部分のみ削りとり「能登」と書き直されているものであろう。さて、下町村を管治していた各藩主のうち、「能登」つまり「能登守」の武家官位を称していた人物は、延享4年(1747)からこの地の領主となった従五位下能登守である土浦藩三代藩主土屋篤直(享保19年(1734)～安永5年(1776))ないしは五代藩主土屋泰直(安永6年(1777)～寛政2年(1790))しかいない。新たに「能登」と書き直されていることを鑑みれば、おそらく土屋篤直が領主となった時、それまで幕府が使用していた高札を「能登」と書き直して利用したものと考えられる。

## 引用・参考文献

- 大原町史編纂委員会編『大原町史年表』 大原町教育委員会 1997  
大原町史編纂委員会編『大原町史 地区誌編』 大原町 2001  
岡山県史編纂委員会『岡山県史』第6巻 岡山県 1984  
岡山県史編纂委員会『岡山県史』第7巻 岡山県 1984  
木村哲男・松原宏昌「近世陣屋を調査する」『別冊歴史読本』71 新人物往来社 1996  
黒田義隆『明石市史』上巻 1960  
黒田義隆編『明石藩領美作国吉野郡 高畑家文章抄』 明石市資料第三集 明石市教育委員会 1982  
椎口松玲『英田郡誌考』 1928  
司法省庶務課『徳川禁令考後聚』第一帙 吉川弘文館 1931  
土浦市史編さん委員会編『土浦市史』 土浦市史刊行会 1985  
長光徳和『備前備中美作百姓一揆史料』 国書刊行会 1978  
橋本海関『明石名勝古事談』 1920  
馬場章「後藤四郎兵衛家の分銅家業」『計量史研究』19 日本計量史学会 1997  
兵庫県史編集専門委員会編『兵庫県史』第4巻 兵庫県 1979  
正木輝雄『東作誌』 1815  
正木輝雄著、矢吹金一郎校訂『新訂作陽誌』第四巻(東作誌第二巻) 山陽新報社 1913  
宮崎頼庸『播磨国三木郡志 美作国吉野郡志』1852  
矢吹正則『美作略史』 1881  
山田研治「分銅花押刻印の実証研究」『計量史研究』19 日本計量史学会 1997

## 註

- (1) 吉野郡などが二度目の幕府領となった時の管治体制については不明な点が多い。基本的には久美浜代官所の所管であり、枝陣屋として下町村には代官が派遣され、吉野郡32村を管治していたようである。ただし『東作誌』には「・・・御代官住居雖無陣屋于今所在」と記載されており、正木輝雄が『東作

誌』編集のために地誌の調査を行った時期（文化9年（1812）以降、刊行された文化12年（1815）の間）前後には代官はいなかったようである。しかし文政5年（1822）には、『郷土史研究史料』に下町陣屋代官亀田清助の在勤の継続願いを大阪高津役所へ差し出すと記載されている。

さて、『東作誌』の内容については、学術資料として評価するには躊躇するとの指摘もあり（治郎丸憲三「作陽誌論序説－東作誌について－」『研究紀要』第10巻第2号 作陽学園学術研究会 1978）、下町陣屋（代官所）は代官が常駐しない陣屋（代官所）であった可能性があるものの、現状では判断が下せなかった。

- (2) 『明石名勝故事談』には陣屋の敷地について「・・・地面は貳反壹畝拾貳歩・・・」とあり、約2,140㎡の広さがあったことが記載されている。
- (3) 『明石名勝古事談』には、「・・・牢屋は三畝歩・・・」と記載されている。
- (4) 『徳川禁令考後聚』第一帙に記載されている内容は次のとおりである。

定

一 火を付る者を志らハ早々申出ヘシ若かくし置にたゐてハ其罪重かるヘしたとひ同類たりといふ共申出るにたゐてハ其罪をゆるされ急度御褒美下さるヘき事

一 火を付る者を見付はこれを捕ヘ早々申出ヘシ見のかしにすヘからさる事

附

あやしき者有らハせんさくをとけて早々奉行所ヘ召連来るヘき事

一 火事出来の時みたりに馳集るヘからす但役人差圖之ものハ格別たるヘき事

一 火事場立下々相越理不盡に通るにたゐてハ御法度之旨申きかせ通すヘからす承引なきものハ搦捕ヘシ萬一異儀に及ハ、討捨てたるヘき事

一 火事場其外何れ之所にても金銀諸色拾ひ取らハ奉行所迄持参すヘシ若隠し置他所より頭ハるゝにおゐては其罪重かるヘしたとひ同類たりといふ共申出る輩者其罪をゆるされ御褒美可被下事

一 火事之節地車たいはち車にて荷物をつみのくヘからす鐘長刀刀脇指等拔身にすヘからさる事

一 車長持停止すとひあつらへ候者有とも造るヘからす一切に商賣すヘからさる事

右條々可相守之若於相背者可被行罪科者也

正徳元年五月日

奉行

## 遺物一覽（観察）表

## 土器観察表

掲載 番号	遺構 土層名	種別	器種	計測値 (cm)			外面色調	備考	実測 番号
				口径	底径	器高			
1	溝	陶器	土瓶	-	-	-	露：にぶい褐 (7.5Y6/3)	関西系、18C後半?	11
2		施釉陶器	碗	-	-	-	露：灰白(5Y8/1)	京焼、18C代	10
3		施釉陶器	碗	-	-	-	露：灰白(5Y8/1)	京焼、18C代	8
4		染付磁器	碗	-	-	-	露：白	肥前、1770~1810	9
5		染付磁器	碗	-	(4.9)	-	露：白	肥前、1660~80	13
6		染付磁器	碗	-	-	-	露：白	肥前、18C代	6
7		染付磁器	碗	10.2	-	-	露：白	肥前系、1780~1810	5
8		染付磁器	碗	-	3.4	-	露：白	肥前、1770~1800	16
9		染付磁器	蓋	9.6	-	-	露：白	肥前、18C前半	15
10		染付磁器	蓋	9.45	4.95	3.0	露：白	肥前系、1780~1840	14
11		備前焼	播鉢	-	-	-	暗灰黄(2.5Y5/2)	卸目単位10本	4
12		土師器	高杯	(21.0)	-	-	灰黄(2.5Y6/2)		24
13	旧耕作土内	灰釉陶器	碗または皿	-	3.5	-	露：にぶい黄橙 (10YR7/3)	肥前、1590~1610	1
14	備前焼	播鉢	-	-	-	橙(5YR6/6)		2	
15	土師器	皿	-	-	-	灰白(2.5Y8/2)		20	
16	灰釉陶器	皿	12.0	4.7	2.7	露：	肥前、1590~1610	18	
17	施釉陶器	小坏	6.6	3.25	3.5	露：白	京焼?、18C代	19	
18	染付磁器	猪口	8.8	-	-	露：白	肥前、1750~70	3	
19	備前焼	壺	11.8	-	-	灰褐(5YR4/2)		21	
20	備前焼	壺	-	-	-	暗赤褐(2.5YR3/2)		23	
21	備前焼	壺	-	24.4	-	灰褐(5YR4/2)		22	
22	染付磁器	碗	11.9	4.4	5.7	露：白	肥前、1780~1810	30	
23	染付磁器	碗	-	-	-	露：灰(5Y6/1)	肥前、18C前半	31	
24	染付磁器	蓋	-	3.6	-	露：白	肥前、1820~60	34	
25	包含層	青磁	蓋	-	4.1	-	露：白	肥前、18C後半、 「福」字銘	17
26	陶器	土瓶	(5.4)	-	-	露：灰白(5Y7/1)	関西系、19C代	28	
27	陶器	蓋	基部径 16.25	つまみ径 4.15	4.45	露：にぶい褐 (7.5YR6/3)	関西系、19C代	26	
28	陶器	播鉢	31.1	-	9.4	にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	堺or明石系	25	

## 金属器観察表

掲載 番号	遺構名	器種	材質	計測値 (mm)				重量 (g)	残存状況	実測 番号
				最大長	最大幅	最大厚	最大径			
M1	伝「陣屋の井戸」内	鉄鏝	鉄	105.5	33.0	5.9		15.37	完形	B
M2		鉄鏝	鉄	(145.0)	(26.0)	9.1		18.73	先端部欠	A
M3		簪	-	168.0	6.5	2.0		8.75	完形	C
M4		分銅	-	38.4	26.2	18.5		112.65	完形	D
M5		分銅	-	18.9	13.2	9.8		15.02	完形	E
M6		鈴	-	26.0	24.5	24.5		10.42	完形	H
M7		鐸	-	29.0	27.5	26.5		13.31	舌欠	I
M8		鐸	-	29.5	25.5	28.0		14.17	舌欠	J
M9		鈴	-	19.5	14.5	14.0		5.21	完形	F
M10		鈴	-	21.5	15.5	14.0		3.85	完形	G
M11		「一刀平五千」?	-	69.0	23.0	3.0		21.17	完形	K
M12		銭	銅					23.3	完形	L
M13	溝	銭	銅				25.4	ほぼ完形		
M14	包含層	釘	鉄	30.0	(7.5)	(6.7)		3.48	欠	

1 調査区遠景  
(東から)



2 調査区近景  
(西から)



3 調査前風景  
(南から)



図版 2



1 石垣全景  
(南から)



2 石垣全景  
(北東から)



3 石垣<西側>  
(南東から)

1 石垣  
＜排水穴付近＞  
（南東から）



2 石垣＜屈曲部＞  
（南東から）



3 石垣＜東側＞  
（東から）



図版 4



1 石垣  
＜屈曲部拡大＞  
（南東から）



2 石垣＜東端部＞  
（東から）



3 石垣  
＜排水穴石敷き＞  
（北西から）

1 石垣  
＜排水穴石敷き＞  
（北西から）



2 溝＜南西側＞  
（南西から）



3 溝＜北東側＞  
（北から）





図版 6



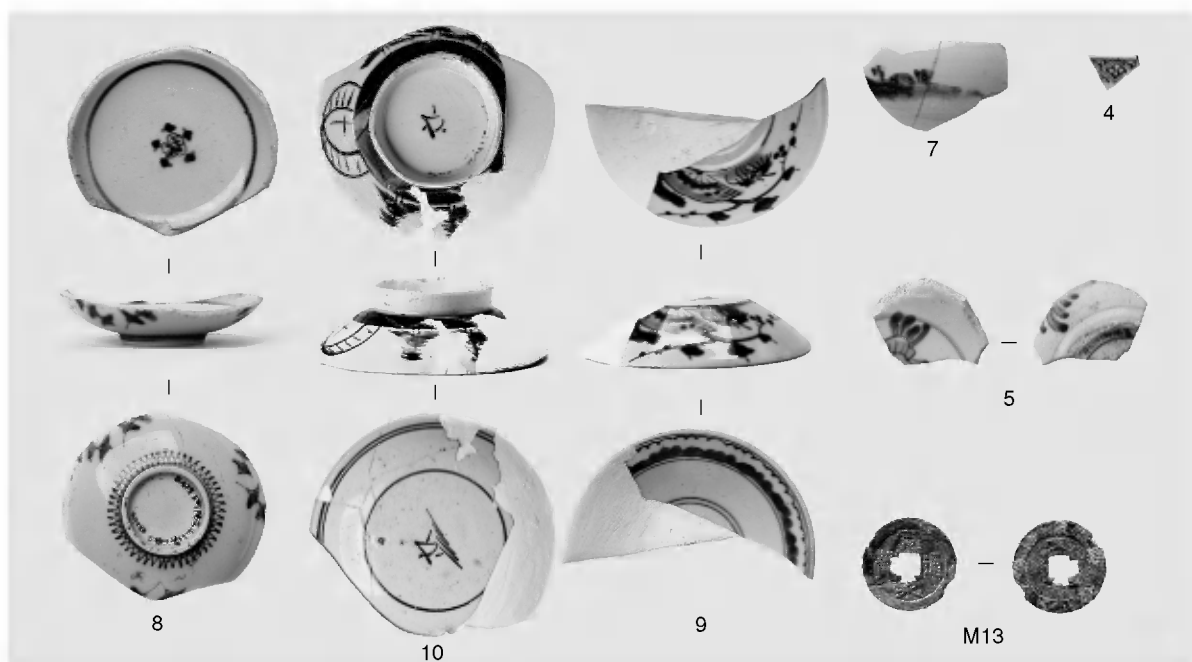
1 A-B断面  
(北から)



2 A-B断面  
<石垣裏込状況>  
(北西から)



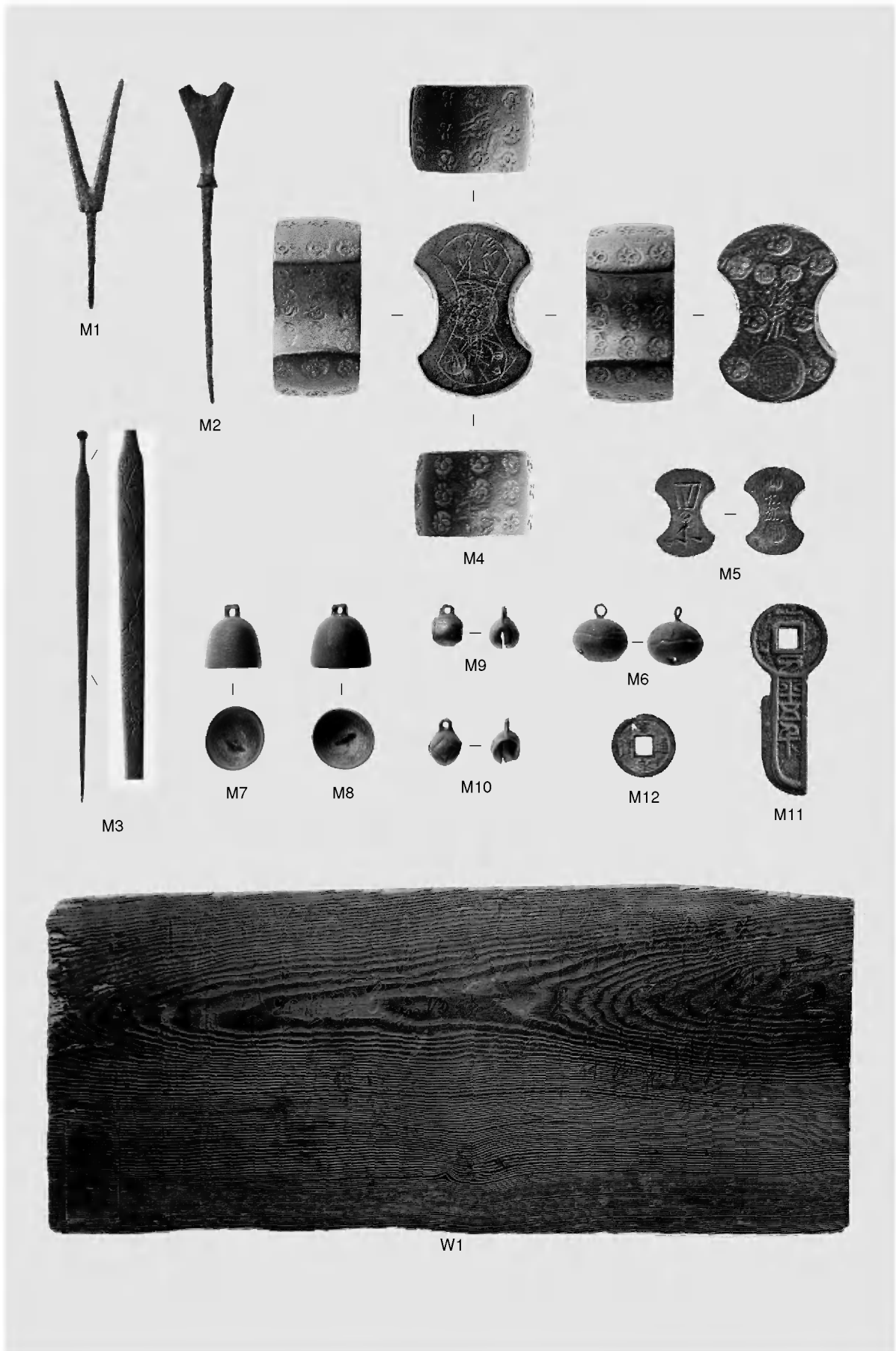
3 C-D断面  
(西から)



1 溝出土遺物



2 包含層出土遺物



春名家所藏遺物

## 報告書抄録

ふりがな	しもまちじんやあと							
書名	下町陣屋跡							
副書名	一般国道429号単県道路改築に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	205							
編著者名	小嶋善邦							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211							
発行年月日	2007年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
しもまちじんやあと 下町陣屋跡	おかやまけん 岡山県 みまさかし 美作市 しもまち 下町 498-6	33215	336410035	35° 06' 17"	134° 19' 25"	20050601～ 20050630	100㎡	一般国道 429号単県 道路改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
下町陣屋跡	城館	江戸時代	石垣 1 土塹 1 溝 1		国産陶磁器 備前焼			
要約	<p>本書は一般国道429号単県道路改築に伴って発掘調査を実施した下町陣屋跡の発掘調査報告書である。遺跡は美作市下町に所在している。</p> <p>陣屋跡は、東西両端が後世の削平等により消失していたが、現状で27.9mを測る石垣が現存していた。石垣より北側の陣屋敷地内では、土塹や石垣と平行に構築されている石組みの溝が検出された。遺物は陣屋造成土内から近世の肥前陶磁器のほか、古墳時代や中世の土師器等が出土している。</p>							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 205

下町陣屋跡

一般国道429号単県道路改築に伴う発掘調査

平成19年2月28日 印刷

平成19年2月28日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会  
岡山市内山下2-4-6

印刷 山陽印刷株式会社  
岡山市富吉3098-1



本文用紙は古紙配合率100%再生紙を使用しています